
年越しシンデレラ

塚本リューヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年越しシンデレラ

【ZPDF】

Z0430BA

【作者名】

塚本リューヤ

【あらすじ】

12月ももう終わり。

来年卒業となる中学3年生の由海は、同じクラスの凜の事をずっと思い続けていたが、声をかける事が出来ずについた。しかし終業式も終わり、下校の途中で親友の怜奈がある提案を持ち出す。由海の恋の行方は……。

始まり（前書き）

魔法にかけられた由海は凜とどんな関係になつていいくのか……。
最後はまさかの展開に！？
中学生の切ない（？）ラブストーリーです。
ぜひご覧ください。

始まり

雪城中学校3年3組の教室で、山崎由海は小さなため息をついていた。

2学期の終業式が終わり、明日から冬休みに入る。

そして今は終学活の時間であり、この時間が終われば下校となる。（はあ……今年も凜君と話せなかつた……）

そう思いながら見つめる視線の先では、クラスで人気の美男子、吉村凜が頬杖をつきながら先生の話を聞いている。由海は毎日、凜の事を見つめ続けているが、向こうが気づく様子は全く無い。

そうしていつに終学活の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「よーしそれじゃ、みんな健康に気を付けて、始業式には元気に登校してくるよ!」。良いお年を。さよなら」

そう言って先生が話を締めくくると同時に、学級委員が号令をかけ、クラス全員が一斉にあいさつをして解散となり、次々と教室を出て行つた。

由海もすでに帰り支度を済ませていたので、続いて教室を出ようとしたが、

「おーい、由海」

と呼びとめられた。

振り返らなくても誰なのかは検討がついていた。振り返つてみるとやはりそこには親友の高橋怜奈の姿があった。怜奈とは1年生の時に同じクラスとなり、それから親しくなった。2年生からは違うクラスになってしまったが、今でも二人は、お互いに特別な存在である。

「一緒に帰ろ!」

と怜奈に言わされたので、

「うん、いいよ」

と由海は答え、怜奈とともに歩きだした。

そして学校の校門を抜け、お決まりの下校ルートに差し掛かつた頃に、突然、怜奈が声をかけてきた。

「そういえばさあ、由海、今年も凛君と話せなかつたんじょ」由海は1年生の時に凛に一目ぼれした時、真っ先にそのことを怜奈に告げていた。

「うん……」

そう答えるしかなかつた。事実、凛と同じクラスになつたものの、1年間一言も話せていなかつた。

すると怜奈は、由海が全く予想もしていなかつた一言を言った。「しようがないなあ、舞踏会に行けないあわれな娘のために、私が魔法をかけてやるか」

「え？」

意味が理解できなかつた。「魔法をかけ」とは、一体どうことなのだろうか。

「由海、最近クラスで流行つてるサイトやつてるでしょ？」

「ああ、あのチャットで離れた所にいる友達とこいつでも話せるつてやつ？」

そのサイトの事なら由海も知つていた。無料登録の会員制のサイトで、ニックネームを検索して仲間を見つけることができ、一年ほど前からクラスの間で話題になり、由海も半年前から始めていたのだ。

せりに怜奈はこう続けた。

「そうそう、それ。でさ、今日ね、2組の岡島さんが話してゐの聞いちゃつたんだけど、凛君もそのサイト、最近始めたらしいよ」

「えつ、嘘！？」

思わぬ情報に心が舞い踊る。

「ほんとだよ。『ヨシムリン』つていうのが前でやつてるんだって。これつて凛君と話す絶好のチャンスだと思わない」

そのネーミングセンスはどうかとも思つたが、せつかくの凛と話

すチャンスなのだ。由海はそれから、ヨシムリンに関する事を怜奈から教えてもらつた。

そうして、しばりへ怜奈と話してくるついで、分かれ道に差し掛かつた。

由海の家は左に曲がった先にあるが、怜奈の家は右の道の先にある。

「あつ、ここまでだね。じゃあね由海。良いお年を～」

最後の「良いお年を～」が、なんとなく意味ありげに聞こえた。

「じゃあね～」

そういうて怜奈と別れ、左の道へ曲がると同時に、由海は一旦散に駆けだした。

急いで家に帰り、

「ただいまっ」

と言いながら階段を駆け上がり、一階にあるマイルームに入ると、着替えるのも忘れて机の上にあるノートパソコンを開き、電源ボタンを押した。

待ち受け画面が開くまでの時間をこれほどじれったく感じたことはなかつた。

下の階から母の声が聞こえてくる。

「由海ちゃん、どうしたの？なんか騒がしかつたけど」

「ごめん、お母さん。急いでるの」

そう答えている間にやっとパソコンが立ち上がつた。

インターネットのウイングウを開くと、例のサイトに接続し、検索の欄に怜奈から教えてもらつた凜のニックネームを入力し、検索ボタンを押した。

すると、「ヨシムリン」という名が一件だけヒットした。

期待に胸を膨らませながら、そのリンクをクリックしてみる。すぐページ移動が完了した。

プロフィールを確認すると、中学3年生の男性で、このサイトは始めたばかりだといつ。怜奈の情報と一致する。彼で間違いなさそ

うだ。

ヨシムリンのチャットのページに移ると、ちょうど彼は友達と会話をしているところだった。話しかけるなら今しかない。

だが、由海はそれをするためらつていた。

（もしも、私だってバレたら……もし、まったく相手にされなかつたら……）

しかし、由海は来年、卒業となる。凛と同じ高校に入ることはないだろうし、もう会うこともないだろう。つまり、この機を逃せばもう一生、凛と話す事が出来なくなるかもしれないのだ。

それに、と由海は思い改める。ここはネットの世界なのだ。どれだけ失敗しても現実に影響することはほとんどない。

ややこしこ二ヶクネームを付けるのも面倒だつたため、そのまま「ヨミ」「ミ」といふ名でサイトに登録していたが、同じような名前の人物なら日本中に山ほどいる。自分だとバレることもまずないだろう。由海は勇気を振り絞り、ヨシムリンに向かってこつ送信した。

『こんにちわ。あなたと同じ中学3年生のヨミです。よろしくね』
まずは挨拶からでいいだらう。後は相手の反応を待つのみ。

数十秒後、相手から返信が来た。

『こんにちわ、ヨミさん。よろしく』

まずはまずの反応だ。とりあえず無視されることはなかつた。それから由海は凛にいろいろな質問をし、少しづつ接近していった。

『ヨシムリンさんの誕生日は何月ですか』

『僕は11月生まれです』

『嘘つ！私も11月生まれです』

これは本当の事だつた。由海は凛が自分と同じ11月生まれであることに驚き、喜びを感じていた。

その後も、由海と凛には血液型など、いくつか共通点がある」とが分かり、ますます親しくなつていつた。

そうしてしばらく話していくうちに、下の階からまた母親の声が聞こえてきた。

「由海ちゃん。ご飯できるよー」

「うん、わかった。今行くよ」

そう返事をして、早く夕食を済ませて凜と会話をしようと思つた。がら、由海は急いで階段を駆け下りて食卓についた。母は準備を済ませて台所から戻つてくると、少し驚いたような顔で聞いてきた。

「どうしたの由海ちゃん。まだ制服のままじゃない」

と言われ、由海は自分が着替えていない事に気が付いた。凜と話すことになつて夢中で忘れてしまつっていたのだ。

「うめん、忘れてた。後で着替えるよ」

由海はそう答えると急いで夕食を食べ始めた。

母は少し訝しげな顔をしていたが、それ以上は何も追求してこなかつた。

最悪なクリスマス

それから数日間、由海と凜のネット上の会話続いた。

凜はいつも5時から6時の間と、9時から10時までの間に分けてチャットに参加していたので、由海にとつては毎日たった2時間しか話せないわけだが、わずかな間だけでも凜との会話はとても楽しく、本当に魔法で純白のドレスを着て、ガラスの靴を履き、王子様と踊つていてるようだった。

毎日話しかけるのは迷惑かとも思つていたが、凜はいつも優しく返事をしてくれていたし、少しでも凜と話がしたかった。

そんな日々が続き、由海は12月25日の朝を迎えた。

由海はいつも午前7時になると自然と目が覚めて、すつきりとした朝を迎えるのだが、この日はいつもと違つていた。

由海は異常な暑さにより目を覚ました。なぜか体が鉛のようになに重く感じる。

ケータイを開き時計を見ると「6：00」と表示されている。つまりは午前6時。いつもならこんなに早く起きることはないはずだが、今感じている異常な暑さのために早く目が覚めてしまったのだろう。由海はこの症状に心当たりがあつたが、すぐにその考えを否定し、そうでない事を願つた。こんなことは中学に入学してからは一度もなかつたのだ。まさかクリスマスに……。

重い体を引きずりながら下の食卓に降りると、由海よりも早起きな母がすでに朝食の準備をしていた。

「お……かあ、さん……」

「つまく声が出ず、母にも届いていない。だが気配を感じたのか、母は由海の存在に気づき、振り返る。そして、すぐに彼女の様子が変だと気づいた。

「ゆ、由海ーどうしたの。具合悪いの」

呼びかける母の声が遠ざかっていき、やがて目の前が真っ暗にな

つた。

「ん……」「

由海が田を覚ますと、そこは自分の部屋ではなく、一階の畳部屋だった。

頭にひやりとした感触を覚えて、触れてみるとやはり熱を冷ますためのシートが張つてあつた。

「おひ、気づいたか」

それは母の声ではなく、男の声だった。だが由海の父は毎日朝早くに仕事を出て、夜遅くに帰つてくる。それは休日も同様であり、今家にいるはずはない。右に田を向けると誰かがそこに座つているのだが、まだ意識がはつきりしないせいか、ぼんやりとしか見えない。

やつと意識が完全に戻り、そこにいる人物が誰だか分かつた。

「健介……」

「おひ」「

山崎 健介やまとざきけんすけは少し照れたような顔をして返事をした。

健介は由海の家のすぐ近くに住んでいて、苗字も由海と同じで、小学生からの同級生でもあり、由海の唯一の男友達だった。

「なんで、ここに……」

率直な疑問だった。健介とは怜奈と同じく中学2年に上がつた時にクラスが離れてしまつていた。それ以来、あまり話す事もなく、お互に家に遊びに行くこともなくなつていた。

由海の質問に対し、健介はなぜか恥ずかしそうに答えた。

「い、いや、たぶん由海ならクリスマスでも暇だらうなあつて思つて、久しぶりに遊びに来てみたんだけどさ、由海の母ちゃんから、40度も熱があるつて聞いたから、見舞いに来てやつたんだよ」

由海は、その言葉で自分の予想が的中していた事を理解した。やはり由海は風邪をひいていたのだ。しかも熱が40度もあるとは。

「別に頼んでないんだけど」

「つるせえ」

健介に見舞いに来てもらつても、由海は全く喜べなかつた。「由海ならクリスマスでも暇だり」「といつ言葉にも腹が立つたし、何よりも、クリスマスに風邪をひいただけでもショックなのに、健介といつしょだと思つとますます落ち込んでしまつた。

「私、もう寝るから、早く帰つてよ」

由海がそう言うと、健介は

「はいはい、悪かったな。お邪魔しました」

と言つて出て行つてしまつた。

久しぶりに健介と話したが、そんな事は喜んでいられないほど由海は苦しんでいた。寝ようと思つてもなかなか寝付けなかつたが、徐々にまぶたが重くなつていつた。

その後も由海の熱はなかなか下がらず、落ち着いたのは12月31日の朝だった。

由海はその日も一階の畳部屋で寝ていた。

「おばやーん、これどこに運べばいいんですかー」

そう母に聞く健介の声が聞こえてくる。

健介は由海が風邪をひいてから毎日、見舞いに来ていて、どういふわけか大掃除まで手伝っている。

「ありがとう、健介君。ホント、助かるわ」

母はそつ言うが、由海はあまり快く思つていなかつた。

「どうじつつもり?」

休憩も兼ねて再び由海の寝ているそばに座つた健介に、由海はそう聞いてみた。

「何が

「だから、なんで毎日お見舞いに来て、大掃除までやつてるのかつて事」

そう由海がそつ尋ねると、健介は分かり切つた事を言つよつて

「いいじやん、暇なんだからよー。それに、おばさん大変そうだろ」と答へ、さらには

「おれんちの掃除は終わつたの」

と付け加えた。

結局、健介は掃除が終わるまで母を手伝い続け、5時過ぎに帰つて行つた。その頃には由海の熱も平温に近くなつていた。

夕食の時になると、母が

「今日は健介君が来てくれて本当に助かつたわね」

などと言つので、由海はますます機嫌が悪くなつてしまつ。

「そついえば由海、健介君と付き合つてゐるの」

「は? そんなわけないでしょ」

母がいきなり由海の予想もしていないような事を言い出したので、由海は慌てて否定した。

事実、健介とは小学生の頃から仲よくしてきたが、恋愛の対象として見た事は一度もなかつた。

午後9時。

『こんばんは、ヨシムリン』

熱もだいぶ下がってきたので、由海は再びチャットを始めていた。
『こんばんは、ヨシ。しばらくチャットやってなかつたみたいだけ
ど、どうしたの?』

凛が由海の事を心配してくれたので、由海は少し嬉しくなつた。

『うん、ちょっと風邪ひいちゃつて。もう大丈夫』

『そ、うなんだ。よかつた。』

それから数十秒後に、凛からまた送信が来た。

『今日は大晦日だから、12時まで起きててもいい事になつてるん
だ。11時からまたくるね。それじゃ』

そのメッセージを見て、由海は嬉しくてたまらなくなつた。由海
も毎年、大晦日は12時までテレビを見たりして過ごしてもいい事
になつてゐる。凛と話しながら年末を過ごせると思つと、心が躍つ
た。

テレビ番組を見ていても、年越しそば(カツブめん)を食べてい
ても、由海の心は落ち着かず、11時まで残り10分と書つところ
まで来ると、パソコンの前を行つたり来たりしてゐた。

そして11時まであと5分と言つといひで、由海の携帯が鳴り響
いた。

こんな時に誰だろう、そう思いながら電話に出ると、

『由海つ！風邪ひいたんだつて？大丈夫？』

という姉の声が聞こえてきた。

由海の姉は遠く離れた県にある寮制の私立高校に通つてゐる。

「うん、大丈夫。お姉ちゃんは？今、何してるの？」
そう聞くと、姉は嬉しそうに答えた。

「わ、私？私はね、彼氏と一緒に」

姉に彼氏がいることは2年ほど前に聞いていた。こんな時間に彼

氏といいるのもどうかと思うが、由海は少し羨ましかった。

「そう。私はもう大丈夫だから。じゃあね。良いお年を」

由海がそう言うと、そう

「良かった。良いお年を」

と言つて向こうから通話を切つてしまつた。

（はあ……いいなあ、お姉ちゃんは……）

しばらくの間そう思つていたが、はつとなつて時計を見ると、1

時5分を指している。

由海は急いでパソコンの前に座つた。

それからしばらく、由海はまた凛と話していた。内容は今日見たテレビ番組についてなどだが、由海は今日、凛に別の事を話すと決めていた。

11時55分。

由海はついに心を決め、凛にこう送信した。

『私、あなたの事好きになつちゃつたかも』

人生初の告白だった。ストレートに「好きです」と伝えるのも恥ずかしかつたので、さりげなく想いを告げた。

凛からの返信が来るまでの時間が、いつもよりもずっと長く感じた。

魔法が解ける時

午前0時。

凛からの返信は、年明けと共に送られてきた。

それと同時に由海の携帯のメールの着信音がなったが、そんなことは気にする事も出来なかつた。

見るのが怖く感じたが、由海は勇気を出して凛からの返事を見た。
『あははっ、ごめん。俺、彼女いるんだよね。マリつていうんだけどさ』

それを見た瞬間、由海は自分の中にある物がすべて、音を立てて崩れしていくような気がした。

冗談だと思ったのだろう。凛はとても軽く、由海の心を打ち碎いた。

マツとこうのは恐らぐ、岡島真理おかじまじゅりの事だらう。

真理は3年2組の生徒で、スタイル抜群、ルックスも抜群で、成績も優秀、誰もが憧れる存在だった。

「岡島さんが話してるの聞いたんだけど」

怜奈は確かにそう言つていた。そうか、だから真理はそのことを知つていたのだ。

魔法で作られた綺麗な衣装もガラスの靴も、午前0時とともに、元せんとどもに、消え去つてしまつた。

由海はしばらくの間呆然としていたが、ふと、ある事に気づいた。そういえば、さつきのメールは何だったのだろう。

恐る恐る携帯を開き、画面を確認すると、確かにメールが1件届いている。

(こんな時間に一体誰なの……)

そう思いメールを確認すると、それは健介からのものだった。

(何? なんでこんな時間に……)

健介からメールが来るのは初めてだ。中学1年生の時にアドレス

を交換するにはしたものの、結局お互い使った事は一度もなかつた。それが今届く事 자체、あり得ないことだつたが、メールの内容はさらにあり得ないものだつた。

『Happy new year. I love you』

見た瞬間、由海は思わず吹き出してしまう。

(は……？何これ)

まったく意味が理解できない。英文も健介にはまったく似合わなかつたし、「Happy new year」はいとしても、「I love you」とは一体……。

訳が分からず、どう返信したらいいかも分からぬ。いや、そもそもこれは返信するべきなのだろうか。

混乱して、凜に振られたショックなどすっかり忘れてしまつていた。

考へても仕方がないので、由海はとりあえずベッドに入った。もう風邪は治つているといふのに、やはりなかなか寝付けなかつた。

た。

午前7時。

由海はベッドからね起きるや否や、すぐに携帯を取り、健介に電話をかけた。

数秒後、寝ぼけ気味の健介の声が聞こえてくる。

『ん、もしもし……由海か？あけましておめでとう』だが由海は新年の挨拶はせず、いきなり疑問をぶつけた。

「ちょっと健介！なんの、あのメール」

その一言で、健介は完全に目が覚めたようだ。

『み、見たのか』

まるで見て欲しくなかつたかのようだ。

「見たよ。てか、全然似合わないし。なんの、『I love you』って」

『い、いや……だから、その……』

しばらぐの沈黙の後、健介はいきなりいつ続けた。

『す、好きなんだ！お前の事。ずっと好きだった。小学校の時から

……』

突然の告白に、由海はどう返せばよいのかも分からなくなってしまった。

『それで、来年卒業したら、お前とも話せなくなると思つて、だからーその前に伝えたくて……』

それは由海の凛に対する思いとまつたく同じものだった。

『だから、由海！お、俺と……付き合つてくれませんか』

その丁寧な頼み方も健介らしくない。だが……、由海はこれまでの事を思い返してみた。

由海にとつて健介は親友であり、それ以上の感情を持った事は一度もなかつた。

そして、由海は凛の事をずっとと思い続けていた。できれば、諦めたくない。だが、凛にはあまりにもあつさりと振られてしまった。凛はどんなに思い続けても、絶対に手の届かない存在だろう。

一方、健介は由海が風邪をひいている間、ずっとそばにいてくれた。健介なら、どんな時でもそばにいて、守ってくれる気がする……。

由海の心は決まった。

「「めん..」

冬休み明けの始業式が終わって下校時間となり、由海が校門を抜けようとした時、いきなり怜奈がそう言いながら追いついてきた。かなり急いできたのだろう。息が乱れている。

「ホント「めんね、由海！ 今日……岡島さんが……実は凜君と付き合つて……私、知らなかつたの。『めんねえ……』」

怜奈はそう言つながらすでに泣きそうになつてゐる。

「ああ、そのことが。いいんだよ、怜奈。もう全然気にしないから」

由海は本心からそう言つたのだが、怜奈は自分に氣を使つていてると思つたらしく、なおも執拗に謝つてきた。

「ホント「めん！ ほんとに……」

「おーい、由海！」

ちょうどその時、後ろから誰かの呼ぶ声が聞こえてきた。振り返ると、やはり健介がこちらに向かつてきている。

「おーい、由海。置いていくなよな。てか、ひょっとしてお前、俺と付き合つてる事忘れてないか」

「ああ、『めん。忘れてたかも』

と「冗談交じりにそう言つと、

「おーい！ そういうの、マジで傷つぐぞ……」

と健介は少し落ち込んだように見えた。

「『めんごめん、『冗談だよ、冗談』」

由海がそう言つと、健介は落ち込んでいたのが嘘のよつて弱るへなり、

「そつかーじゃ、一緒に帰るわー。」

と言つてきた。

「うん、こによつ。怜奈「めん。そういううわけだから、今日は健介

と一緒に帰るね」

由海がそういうて怜奈の方を見ると、由海と健介の関係を知った怜奈は驚きのあまり、口をあんぐりと開けて固まってしまっている。

「おーい、怜奈。大丈夫？」

由海が呼びかけても怜奈は全く反応せず、ただ口を開けて突っ立つていて。あと数分はこのまま動かないかもしない。

「じゃあね、怜奈。行こ、健介」

そういうて由海は健介の手を引っ張つて歩いていった。怜奈には悪いが、今日は健介と帰りたかったのだ。

健介からの告白を受けたあの時、結局、由海はOKを出した。どうやつても手の届かない王子様を追い続けるよりも、自分だけを見てくれる、自分だけの王子様を選んだのだ。自分でそう考えて、由海は可笑^{おか}しくて笑つてしまつた。健介が不思議に思い、見つめてきたが、なぜ由海が笑つているのかは絶対に、誰にも分からぬう。

健介に王子様なんて言葉は絶対に似合わない。でも本当に、凛よりも素敵な人だ。由海はそう思つた。今では凛に対して何の恋愛感情も抱かない。やはり自分には合わない人だったのだろうと由海は思つた。

魔法なんてものを使わなくとも、ガラスの靴が無くても、自分を見つけてくれる人が、本当の王子様なのだから。

私の王子様（後書き）

最後まで読んでいただいた方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430ba/>

年越しシンデレラ

2011年12月31日23時49分発行